

# ECFに基づく新たな文法指導へのアプローチ

## A New Approach to Grammar Instruction Based on ECF

佐藤芳明

Yoshiaki SATO

慶應義塾大学SFC研究所上席訪問研究員

Senior Visiting Researcher at Keio University SFC Research Institute

### Abstract

With communicative approach widespread at EFL classrooms, grammar instruction has often been the target of criticism on the grounds that it is ill-equipped for communicative use. It is crucial indeed that communicative English competence be held in high regard in this age of ours when English has become *the* international language. However, no known language exists without grammar. Besides, L1 interference is inevitable in principle for adult EFL learners, since humans naturally tend to depend on the pre-established knowledge system when learning anything new. It follows, then, that a new pedagogical grammar has to be introduced which will be easier to teach, to learn and to use. For that purpose, ECF divides conventional grammar into four categories: grammar of rules, lexical grammar, chunking grammar, and notional grammar. This paper focuses on the potential of lexical grammar, which assumes that some lexical items contain grammatical information, and provides networking consistency among separate usages of a certain lexical item or word form from the viewpoint of lexical core. To illustrate this, we take up such items as BE, TO DO, DOING, and WHAT. A textbook to be used for high school students from 2007 school year is referred to in order to clarify the point of our discussion.

### Keywords

lexical grammar, core, semantic motivation, networking,  
communicative competence

### 1. はじめに

近年、英語教育の現場において、コミュニケーション重視のアプローチを背景に、文法指導軽視の傾向がしばしば指摘されている。確かに、国際語としての英語を学ぶ必要性が以前にもまして高まっている状況にあって、英語コミュニケーション能力重視の姿勢が不可欠であることは言うまでもない。しかし、そのことが即座に文法指導を不要視することを正当化するものでは決してない。そもそも文法のない言語は存在しない。そして、生活言語

として半ば無意識に習得される場合は別として、ある言語を外国語として学習する際には、その言語を使って機能的に意味編成を行うのに必須の装置である文法を身に付けることが欠かせない。また、人間が新たな知識を学ぼうとするときには、先行知識体系に依存せざるを得ないが、これは外国語学習においては、母語の影響・干渉が原理的に避けられないということを意味する。そのことからも、外国語の教育においては、文法指導が不可欠であると言わざるを得ない。

しかし、ここで改めて問うべきなのは、そもそも英文法とはどのような中身を指し、それをどのように教えるべきか、ということである。従来の学校文法は、「教えやすさ(learnability)」「学びやすさ(learnability)」「使いやすさ(usability)」という3つの観点からみたときに、教師にとっての「教えやすさ」はある程度認められたとしても、学習者の観点からみた「学びやすさ」にはおそらく種々の問題があり、「使いやすさ」はほぼ考慮の埒外に置かれていたということは、指導の現場で夙に実感されてきたことと思われる。その具体的な問題のうち主なものを挙げるとすれば、第一に、「不定詞」「分詞構文」「関係代名詞」などの文法用語を中心に、分類作業が行われる傾向が強く、第二に、細部の構造的分析にこだわるあまり、英語という言語システムの全体像が把握し難い。第三に、文法が恣意的な規則の体系として提示されるために、「なぜそうなるのか」という意味的動機付けがつかめず、文法が単なる暗記事項と捉えられる傾向がある、などの点が指摘できる。そして、これらの問題の当然の帰結として、従来の文法指導は、英語コミュニケーション能力の養成に資するとは言い難いものであった。

そこで、これらの問題を乗り越えるべく、「教えやすさ」のみならず、「学びやすさ」と「使いやすさ」の条件を具えた新たな英文法が編成される必要がある。その構想を、『幼児から成人まで一貫した英語教育のための枠組み—ECF』(以下『ECF』) 第三章第二節の主旨に沿って記すと、以下のように4つの文法カテゴリーが想定される。

- 1) 語順、活用、一致などの慣習的な規則の体系に関する文法(grammar of rules)。
- 2) 情報単位(チャンク)をいかに形成し、それをどう連鎖させるか(チャンкиング)という観点からみたチャンкиング文法(chunking grammar)。
- 3) 語彙項目に文法的情報が含まれているという前提を立てて、語彙の中核的意味(コア)から文法現象を捉えようとする語彙文法(lexical grammar)。
- 4) 慣用的構文と意味・機能の関係に注目する表現文法(notional grammar)。

上記内容は、従来、「文法」という呼称で一括して扱われてきた知識項目を、言語形式とコミュニケーション上の機能的性質との相関に照らして振り分けたものであり、いたずらに学習の対象となる項目を増やすことを意図するものではない。むしろ、これまで雑多に扱われていた項目を、「規則」「情報単位(チャンク)」「語彙」「慣用」という観点から体系的に整理し直して、学習・指導の効率を高めることをねらいとするものである。

## 2. 語彙文法(レキシカルグラマー)

本論は、上記4つの文法カテゴリーのうち、レキシカルグラマーに焦点をあてる。レキシカ

ルグラマーとは文字通り、語彙(レキシコン)から文法(グラマー)を捉えるというものである。その両者をつなぐ役割を果たすのが、文法現象に関わるとみなされる語彙のコアである。コアとは、文脈差によって左右されない、語の中核的な意味のことであるが、コアに基づく発想を要言すれば、「形が違えば意味も違う; 形が同じであれば共通の意味がある」となる。そのうち、「形が同じであれば共通の意味がある」という観点で文法を捉えると、通常は異なる範疇に位置づけられて分断されてしまっている、同一語彙を含む複数の用法を、コアを共通の糸として一貫した形で理解できるようになる。また、「形が違えば意味も違う」という観点については、形の違いに応じた意味の違いを認めることから、機械的な書き換えを乗り越えて、個々の構文の特性に対する sensitivity を高めることにつながる。要するに、語彙のコアから文法をみると、コトバの形から素直に意味的動機づけを読み取ることにつながり、文法的な現象がどういう仕組みで生じているのかということがスッキリと理解できるようになる。それゆえにまた、自信をもってその知識を使ってみようという姿勢を育てることにもつながることが期待される。

ここで、具体的にレキシカルグラマーで扱う主要な語彙項目とそれに関連する文法項目を挙げれば、概要、以下のようになる。

- BE(存在, 進行, 受身)
- HAVE(所有, 経験, 完了, 使役, 受益, 被害)
- TO DO(前置詞の to と不定詞の to)
- DOING(現在分詞・動名詞)
- 法助動詞
- 接続詞
- WH-(疑問詞・関係詞)
- 決定[限定]詞

上記の内容を概観すれば、以下のようになる。まず、BE については、<存在>というコアが「進行」や「受身」までをも読み解く鍵になり、HAVE では、<所有>から<経験>への拡張によって、「使役」構文や「現在完了」の用法までが説明の射程に収まる。to 不定詞は前置詞 to との連続性をふまえて捉え直す。

また、DOING のように、語彙項目というより「語形」に注目するケースもあるが、その場合も、「形が同じであれば意味に共通性がある」というコアの原則は貫かれる。

さらに、法助動詞、接続詞、疑問詞・関係詞、決定[限定]詞は、システムとしての語彙文法として必須の項目となる。法助動詞は、それを動詞句に組み込むことで話者の主觀提示を行うものとして、接続詞は論理的な単位で情報提示を行う際の結節点として機能するものとして、疑問詞・関係詞は未知の情報を検索したり、相手にとって必要とみなされる説明を加える機能をになうものとして、そして、決定[限定]詞は名詞句の指示対象が指定可能とみなされるか否かなどの認知的身分を示す働きをもつものとして、それぞれ位置づけることができる。これらのシステムの中で、各語彙項目がいかにコアを基点としながら、用法の拡張をみせ、文法現象を引き起こしているかを分析、記述することもレキシカルグラマーのね

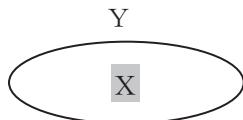
らいとなる。

以下、このレキシカルグラマーの観点で、いくつかの具体的な語彙項目についてみていきたい。紙幅の都合により、上記項目を網羅的に扱うことはせず、むしろ、語彙のコアが文法理解に大きく貢献する典型的な事例として、BE, TO DO, DOING, WHATを取り上げ、それぞれに議論を加えることにしたい。

### 3. 分析事例

#### 3.1 BE(存在・進行・受身)

BE 動詞は、X be Yにおいて X が Y で示される空間の中に位置づけられるということを表す。つまり、Y は X が存在する場として捉えられる。そこで、BE のコアは「(何かがどこかに)ある」として捉えることができる。being が「存在」を意味するということも、このことを裏付ける。



このコアから、BE の用例を見直してみよう。まず、BE の本動詞の用法では、一般に、以下のように BE の後ろに副詞(句)、形容詞、名詞句がくる。

##### ■BE+副詞(句):

Look, I'm here. / She is in the kitchen.

##### ■BE+形容詞:

I'm fine.

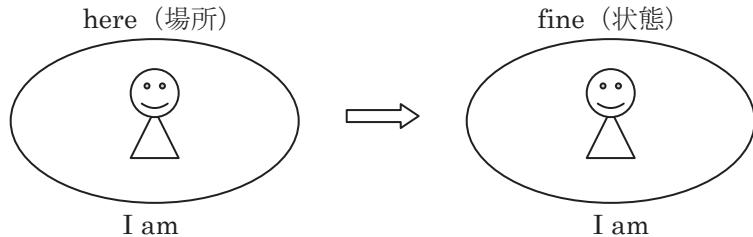
##### ■BE+名詞(句):

I am a student. / Giraffes are gentle animals. / My name is Ken Ishida.

まず、Look, I'm here. は、BE が主語の存在の場所を示す例で、「(何かがどこかに)ある」というコアがストレートに表現されたものだと言える。文型的な考え方では、I'm here. の am は「存在」を示す自動詞で補語が不要であり、従って here という副詞は省略可能である、などという無理な解釈がなされることがある。しかし、何かが「ある」というときには、「どこに」という場所の情報が示されるのが自然である。だから、I'm here. や She is in the library. などの用例は、場所の副詞(句)を伴った形で、BE の基本的用法として位置づけられるべきである。確かに、場所を問わずに存在を強調する場合もある。I think; therefore I am. (我思う故に我あり)などがその例である。be の後に場所を示す副詞がないのは、「どこか」ということを問題としないことで、「存在」そのものをクローズアップする、という意味的な動機付けによる。それは、To be or not to be; that is the question. (生きるか死ぬかそれが問題だ) や Let it be. (それ(今の状況)があるがままにせよ)などの例においても同様である。これらは、いずれも「存在」を強調することで、ある種、思弁的な次元に属する表現となっていると思われるが、逆に言えば、日常的に何かが「ある」ということを語るには、それが「どこに」あるかが問題になるということである。

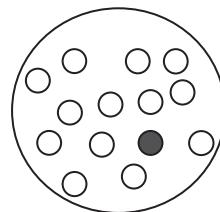
次に、BE に形容詞が続く用法があるが、これは、形容詞が表す状態や属性をある種の

「場」とみなした用法と考えられる。I'm fine. であれば、「今私は fine と言える状態にある」つまり「元気である」と解釈できる。そうであれば、「(何かがどこかに)ある」という BE のコアからみれば, I'm here. と I'm fine. には連続性が認められる。「状態」をある種の「場」とみなすという意味で、以下のような用法拡張としてイメージすることが可能であろう。



次に、BE に名詞句が続く場合だが、これは名詞句の性質によって意味合いが変わる。しかし、いずれの場合も集合論的に捉えると BE のコアがいかに反映されているかがよく理解できるものである。I am a student. であれば、私が「学生」という集合の一員として「ある」ということを表す。ここでは不定冠詞 a が、STUDENT というカテゴリー(集合)から「私」をメンバーの一員として取り出せる、ということを示す。

STUDENT (集合)



I am

Giraffes are gentle animals. のように“X be Y”的 X と Y 双方が複数形の場合には、後者(gentle animals)が前者(giraffes)を集合として包含する関係になる。giraffes 以外にも gentle animals と呼べるものはあるが、とにかく giraffes はその中におさまっている、つまり、「キリンは穏やかな動物という集合の中にある」ということになる。それに対して、My name is Ken Ishida. のように、XとYのそれぞれが特定する対象が重なり合うと、“X be Y”を “Y be X” と逆転させても意味が通る。そのことから、これを「同一」の BE とみなすことができる。しかし、BE のコアはあくまでも「(何かがどこかに)ある」であって、ただちに「同一性(イコール)」を表すわけではない。あくまでも、X と Y の値が交換可能な場合にのみ、その解釈が成立するのである。X と Y の指示対象の範囲が異なれば、たちまちイコールではなくなるということからも、安易に BE をイコール記号扱いするのは控えるべきであろう。

以上は、BEの本動詞と呼ばれる用法であるが、BEはこれら以外にも、進行、受身で使う助動詞としての用法もある。進行形については、たとえば、A dog is running in the snow.

であれば、XにあたるイヌがYの[running in the snow]の領域、つまり、「雪の中を走っている」という動作進行の状態に「ある」と捉えることができる。また、The wall is painted green. のような受動態の be done(過去分詞)も、“X be Y”の図式にあてはめれば、「壁が緑にぬられた状態」に「ある」と捉えることができる。be done の形は、一般に、「行為の完結した状態にある」ということになるが、現代英語ではこの形で使われる過去分詞は、一般に他動詞に限られることから、be doneで「主語が行為をすでになされた状態にある」という受身の構文が成立する。

以上のように、BE動詞のコア「(何かがどこかに)ある」から見れば、BEの用法として、従来は、本動詞の中で文型によって分断されていた知識と、さらには、助動詞の用法として別扱いされてきた項目のすべてを統一的に把握することができるようになる。BE動詞が、英語表現の土台を支える基本動詞の一つであることは誰しも否定できない以上、このアプローチがもたらす教育的な意味は、過小評価できないはずである。

### 3.2 前置詞 TOから TO不定詞

一般に、TO 不定詞に関する指導が行われる際、以下のように、名詞的用法・形容詞的用法・副詞的用法のいわゆる3用法に分類して提示されることが多い。

- |                                      |              |
|--------------------------------------|--------------|
| a) I want to visit Okinawa.          | ----- 名詞的用法  |
| b) I have a lot of work to do today. | ----- 形容詞的用法 |
| c) He worked hard to pass the test.  | ----- 副詞的用法  |

しかし、この分類的手法に頼るのみでは、あたかも不定詞には最初から3つの異なる用法があるって、それらには共通の意味がないかのような印象を与えてしまう。が、これはむしろ品詞的に分類をした結果なのであって、語形からすれば文脈を超えて共通の意味があるはずである。そこで、前置詞の TO にさかのぼって TO DO を捉え直してみるとどうなるだろうか。

前置詞 TO「…に向いて」

→ )( ←

face to face

The score was 3 to 1.

the key to the door

dance to the music

↓

↓

I want to visit Okinawa.

I have a lot of work to do today.

He worked hard to pass the test.

I am glad to meet you.

前置詞 TO は「…に向いて」をコアとする。前置詞は一般に空間関係を示す語と考えられるが、この TO は、対象と「向き合う」関係を示すということが、上の例からもみてとれる。この TO の理解を、TO DO に適用してみると、「ある行為に向いて」いる状況、または、「行為と向き合う」状況を示すということになる。人が行為と向き合う状況をイメージすると、通常、未来の行為が想定されるから、TO DO は概して未来指向になる。たとえば、I want to visit Okinawa. は「沖縄を訪ねるという＜行為と向き合う＞ことを望む」つまり「行きたい」ということであり、I have a lot of work to do today. であれば、「たくさんの仕事」を「これからなすべきこととしてかかえている」ということである。He worked hard to pass the test. であれば、彼は、「一生懸命頑張った」という内容に、「試験に通るという行為にむかって（そうするため）」という目的を加えたものと解釈される。

こうしてみると、従来の不定詞の 3 用法と呼ばれるものは、どれも、「ある行為と向き合う」という TO DO のコアから、一貫した理解が得られるということがわかる。たしかに、I am glad to meet you. のように、未来指向にならない例もある。しかし、この場合にも、「あなたと会うという＜行為と向き合って＞嬉しい」という、コアを生かした解釈が可能なのである。つまり、通常は、時間軸に投射されて未来指向になる TO DO が、例外的にそうならず、単に向き合うというイメージが維持される用法があるということである。You are quite wise to stay away from the trouble. (君はその面倒なことに近づかないのは賢明だ) というのも、その種の例で、You are quite wise という「判断」が、stay away from the trouble という行為を「根拠」として、それと向き合う形で成立しているのである。

参考に、ここでみた TO DO と先にみた BE を合成した BE TO DO という表現について補足すれば、BE TO DO にあるとされる「予定」「可能」「必要」「運命」などの解釈の幅も、以下のようなコアの合成によって理解できる。

$$\begin{array}{c} \text{BE} \quad + \quad \text{TO DO} \quad \Rightarrow \quad \text{BE TO DO} \\ | \qquad \qquad | \qquad \qquad | \\ \text{「ある」} + \text{「行為と向きあう」} \Rightarrow \text{「行為と向きあう状況にある」} \end{array}$$

つまり、BE TO DO を、BE+TO DO と考え、「行為と向きあう」に「ある」を合成して「行為と向きあう状況にある」と捉えれば、あとは文脈に応じて、柔軟な解釈が可能になる。たとえば、The conference is to be held at the end of this month. (会議は今月末に開かれる予定だ) であれば、時の副詞句をヒントに「予定」として解釈され、If liberty is to be enjoyed, we have to give up the idea that it means freedom from all restraints. (自由を享受するためには、自由があらゆる制約からの解放を意味するという考えを捨てねばならない) では、BE TO DO が if 節内にあることから、「そういう行為に向かうなら[そうするためには]」と捉えて、「必要」や「目的」などとして解釈できるという具合である。

以上のように、語形の共通性に注目して、前置詞 TO のコアに照らして TO DO を捉え直せば、従来の3用法を中心とした分類のための分類のような方法を乗り越えて、TO DO 全般を貫く教え方・学び方が可能になるのではないだろうか。さらにそこから、学習者が自らの英語表現においても、不定詞を柔軟に使いこなせるようになっていくことが期待できるの

ではないだろうか。

### 3.3 DOING(現在分詞・動名詞)

現在分詞と動名詞は語形は同じだが、意味的につながりのない別の文法項目とみなされている。ここでは、DOING という共通の語形に注目して、両者の連續性をふまえた理解の可能性を提示してみたい。以下に引用するのは、文部科学省検定高等学校英語教科書(『PRO-VISION ENGLISH COURSE I』桐原書店)として2007年度からの採用が認可されたものの内容である。教育行政の所轄官庁が、文法指導の方法として従来みられなかったレキシカルグラマーのアプローチを公的に承認したことの意義は、今後の教育現場への影響を考えれば誠に甚大である。と同時にレキシカルグラマーの意味と可能性を英語教員が実感をもって理解し、教育現場で実行できるように十分に説明する責任が出てくる(本稿はその一環である)。

さて、現在分詞と動名詞は引用ページのイラスト(p.27 参照)が示すように、左側の「観察可能な動作進行<(現に)…している>(現在分詞)」から、右側の「動作進行のイメージ<…している(する)こと >(動名詞)」という流れで把握することができる。両者に共通するコアをあえて立てれば、「ある行為をしている」となる。それを、「現にしている」のであれば分詞となり、名詞概念化して「している(する)こと」と捉えれば動名詞となる。

STEP 1 の①の例文, *She is singing.* (p.27 参照) は、いわゆる現在進行の例である。これは、彼女が「歌っている」という観察可能な動作の進行状況を表している。*The dog running over there belongs to me.* では、*running over there* が形容詞的に *the dog* を修飾する。たしかにこの現在分詞の形容詞的用法は、進行形の動詞とは違って時制の印がなくなるが、それでも、「走っている」最中の動作が観察可能なものとして描かれている点は進行形の DOING と同様である。*Swimming in the lake, he saw many fish.* は、分詞構文と呼ばれる用法だが、ここでも、「泳いでいる」という動作が観察可能なものとしてまず描かれている。分詞構文は、しばし、「時」「理由」「付帯状況」「結果」などの解釈がなされるが、これらは DOING という分詞にそなわる本来的な意味ではなく、文脈から判断される事柄であるに過ぎない。むしろ、分詞構文の本質は、述語動詞との関係からみた「動作の同時(連続)性」であり、それは、DOING の「行為をしている」というコアからみれば、自然と了解されることである。

一方、動名詞の DOING となると、実際に動作が進行している必要はない。STEP 1 の②の例文, *She loves singing.* (p.27 参照) の *singing* も、*Swimming every day made him strong.* の *swimming* も、むしろ、動作を名詞概念化して、「…している(する)こと」として捉えている。

ところで、動名詞の DOING は、名詞的用法の TO DO とよく比較されるが、TO DO は、一般に遂行を想定された行為であるために動詞的な性質が強く感じられるのに対して、DOING の方は完全に名詞(概念)化しているという違いがある。だから、*Seeing is believing.* はまさに、「見ることは信じること」という感じだが、*To see is to believe.* とすると、「見てごらん、そうすれば信じるよ」というように、多分に手続き的な意味合いが生じる。

また、TO DO が一般に未来指向であることとの対比を意識するあまり、DOING が過去

指向と言われたりすることがあるが、これには十分な根拠がない。たしかに、I remember seeing you somewhere before. のような例では、動名詞が記憶に言及するが、それは remember という動詞から引き出される文脈情報に過ぎない(forget, regret などにおいても同様)。動名詞の DOING 自体は、むしろ、完全に名詞化されているがゆえに時間的には中立的に振る舞う、つまり、過去の回想にも未来の想定にも(もちろん、習慣的な現在にも)使われるのである。ここで未来の想定の例を足せば、Would you consider joining our team? や May I suggest taking a short break? などがある。これらの未来の事柄に、不定詞を使わずに動名詞を使うのは、行為が想定された事柄としてではなく、むしろ、行為を名詞化したアイディアやイメージとして捉えているためである。つまり、consider とは「(するかしないか、そのアイディアの可否)を検討する」ことであり、suggest は「(拒絶される可能性を認めつつ、あるアイディア)を提示してみる」ということである。

このように捉えると、DOING と TO DO の使い分けも明確な根拠をもって行うことができるようになる。たとえば、I enjoy dancing. で to dance としないのは、enjoy という動詞が、これから遂行する動作ではなく、むしろ、経験的に反復されてきた行為のイメージを対象としているためである。avoid doing で to do としないのは、遂行に向かう行為ではなく、むしろ、回避の対象としてアイディアとして処理された行為を示すためである。逆に、refuse to do で、doing としないのは、「(行為と向き合って)きっぱり断る」というところに、TO DO のコアが生かされるためである。

また、従来、start, begin, continue, stop, finish などの行為の開始・継続・終了を示す動詞の後ろで使う DOING は、動名詞と分類されていた。しかし、She started / continued / finished reading. は、まさに、She is reading. という動作進行の状況を、開始・継続・終了させるということに他ならないから、観察可能な動作進行を示す分詞の側に位置づけられるべきものだということになる。

動名詞と不定詞の名詞的用法の比較や使い分けについて、引用の教材 (p.27 参照) では、STEP 2 と Question でふれている。STEP 2 の例文では、I hate *smoking* と I hate *to smoke*. が比較されているが、後者が「タバコを吸うという行為に向かうのを忌み嫌う」つまり、「絶対にタバコは吸いたくない」という行為と相対(あいたい)するニュアンスであるのに対して、*smoking* だと、誰が吸うかにかかわらず、「喫煙」という行為一般を嫌うという解釈が可能になる(もちろん、そこに自分の喫煙経験を含意することも可能)。Question の 2. および 3. は、それぞれ副詞節が未来の事柄を示していることをヒントに、不定詞を選択できる。1. については、finish という動詞の性質からして、動作進行の状況を終えるということで DOING が選択される。

以上のように、現在分詞と動名詞の連続性をふまえて、動名詞と不定詞の名詞的用法の使い分けを明確な根拠を伴った形で行うということも、共通の語形がもつコアに注目するレキシカルグラマーの視点によって可能となるのである。

LANGUAGE TACTICS

### Lexical Grammar

It suggests some ways to keep lights from **becoming** "pollution." → 111.7



～している

～している」という動作の進行を表す。それが観察可能であれば現在分詞、頭の中で思い描くと動名詞になる。

**STEP 1** ～ing の基本的な用法

① 観察可能な動作を表す  
→「実際に～している」(現在分詞)  
She is *singing*. (進行形)  
The dog *running* over there belongs to me. (分詞の形容詞用法)  
*Swimming* in the lake, he saw many fish. (分詞構文)

② 頭の中で思い描く行為を表す  
→「～している〔する〕こと」(動名詞)  
She loves *singing*.  
*Swimming* every day made him strong.

**STEP 2** 動名詞と不定詞の違い

動名詞：頭の中で思い描く行為を表す (名詞的)  
I hate *smoking*. (たばこを吸うこと(喫煙)は大きいです)  
不定詞：一般にこれから向かう〔する〕行為を表す (動詞的)  
I hate *to smoke*. (たばこは絶対に吸いたくない)

---

**Question** ( ) 内から適切な語句を選んで、英文を完成しなさい。

- Finally I finished ( to write / writing ) the essay.
- Promise ( to call / calling ) me when you get to the station.
- Please remember ( to turn off / turning off ) the light when you go to bed.

---

116 LESSON 9

### 3.4 what(疑問詞・関係詞)

what には、疑問詞と関係代名詞があるとされている。そして、その両者の間には意味的なつながりは想定されていない。さらに、関係代名詞の what については、「先行詞を含む関係代名詞で名詞節を導き、the thing which に相当する」という解説が行われており、これが言語の形式と意味の間にあるはずの意味的動機付けを欠いているために、この文法項目が学習者の負担の一部を形成しているということは想像に難くない。

そもそも、「何」という疑問を示すのに what を使うのは理にかなうが、「もの・こと」を示すのに同じ what が使えるのはなぜか。また、一般に関係詞の先行詞とは本来は前方にある名詞を指すはずであるのに、それがなぜここでは「先行詞を含む」となるのか。the thing which に書き換えられるというが、それでは what の what たる所以は何か。等々といった

錯綜とした状況が、関係詞 what をめぐる問題としてある。

これを、レキシカルグラマーの観点からみるならば、やはり一つの語形にそなわる共通の意味があり、そこから文法の理解を改めて打ち立てることが可能になる。ここで、whatについても、前掲の高等学校教科書の記述内容を引用してみよう。ここでのポイントは、whatには「何・どんな」というコアがあり、「何かわからないことをたずねる」のであれば疑問詞となり、「何であるか」を明らかにせずに、漠然と「もの・こと」として示す場合に関係詞になるということである。

STEP 1 ①の例文、*What's the matter with you?* (p.29 参照)は、「何か」わからないことをたずねる疑問文であり、STEP 1 ②の例文 *I don't know what he is talking about.* は、「何か」という疑問を文中に取り込んだ間接疑問文である。これらの what はいずれも疑問詞の用法である。一方、STEP 1 ③の例文 *What is important is that we always trust each other.* では、「何であるか」を明示せずに、漠然と「もの・こと」として提示するために what を使っており、これは関係代名詞と呼ばれる用法である。しかし、ここで疑問詞との連続性を踏まえて解釈すれば、*What is important*(何が大事かと言うと)*is that we always trust each other.*(それは我々が互いに信頼し合うことだ)という具合に理解することが可能である。このことはいくつかの重要なことを示唆する。まず、意味的な関連がないとされている疑問詞と関係詞には、実は、語形に応じた意味のつながりがあるということ。そして、これを他の疑問詞にも応用して考えてみると、「誰か」→「誰かと言うと」、「どれか」→「どれか」というと、「いつか」→「いつか」というとといった具合に、未知の情報をたずねる疑問詞から展開して、説明を追加する関係詞の機能が生じてくるという可能性に想到する。すなわち、*Do you know the man who came yesterday?*を、*Do you know the man*(その人知ってる?)*who came yesterday?*(誰かって、昨日来た人だけど)のように、*This is the book which we talked about then.**To This is the book*(これが本だ)*which we talked about then.*(どれ[どの本]かって、われわれがそのとき話題にした)という具合に捉え直すという発想である。ここで、「誰か(who)」という情報は「人」についてであり、「どれか(which)」は「一定の種類のモノ」についてである。翻って、「何」というのは、人ともモノともつかない何かであるから、その範囲をあらかじめ設定することはできない。そこで、*Do (やれ) what you want.*(何をかって、君がやりたいことを)のように、いきなり what として提示することになる。このことをふまえれば、関係詞 what は先行詞を含まないということが明らかである。だとすると、この what を the thing which に書き換えられるという説明は、「先行詞を含む関係詞」という無理な定義を正当化するための手段に過ぎないということも見えてくる。むしろ、先行詞が原理的に生じ得ない以上、「先行詞のない」関係詞と位置づけて、what の特性を疑問詞とつながるところで捉えられるような指導を心がけるべきであるが、これこそまさにレキシカルグラマーのねらいとするところである。

このように、疑問詞の what と関係詞の what が意味的に連続しているということが分かれば、後者の多様な用法の理解にもつながる。それを指導に生かす工夫として、STEP2 の例文で、what の慣用表現を挙げてある。*what is called* がなぜ「いわゆる」となるのか。それは、「何かと言えば、…と呼ばれるもの」という解釈から理解される。*what's more* でなぜ「さらに」となるのか、それは、「何がさらなる情報かと言えば…」と捉えることによるという具

合である。

それに続く Question の項では、疑問詞 what が導く間接疑問文の知識を使って、関係詞 what の名詞節を構成するというタスクを課している。このタスクをこなすことで何が得られるかと言えば、「同一語形をもつ疑問詞（ここでは what）を使った間接疑問文と関係詞が導く関係詞節は、節の構造がまったく同一であり、しかも、そこに意味的な関連がある」という気づきである。そして、そのとき、従来の文法用語中心の複雑な解釈法を乗り越えて、意味的な動機付けからストレートに言語形式を立ち上げるような production が促されることも期待される、と考えるのは決して無理な想定ではないだろう。この種のクリエイティブなタスクも、異なる文法現象を語彙のコアから統一的に捉えるというレキシカルグラマーの視点によって可能となるのである。

引用ページ：『PRO-VISION ENGLISH COURSE I』 p.100（桐原書店）

LANGUAGE TACTICS

 Lexical Grammar

*What you do makes me cry at night.* → 95.12

**what**

何・どんな

?

わからないことについて尋ねたり、はっきりしないことを漠然と「もの・事」として示したりする。

**STEP 1** what の基本的な用法

① 「何であるか」 わからない対象を尋ねる（疑問詞）  
*What's the matter with you?*

② 「何であるか」 を目的語などにする（間接疑問）  
*I don't know what he is talking about.*

③ 「何であるか」 を明らかにせず、漠然と「もの・事」として示す（関係代名詞）  
*What is important is that we always trust each other.*

**STEP 2** what の慣用表現

① what is called: 何かと言えば～と呼ばれるもの→「いわゆる～」  
*She is what is called a walking dictionary.*

② what's more: 何がさらなる情報かと言えば→「さらに～」  
*He plays the guitar, and what's more, he sings very well.*

**Question** □ 中にある文の語順を変えて、[ ]に入れ、英文の意味を言いなさい。

1. I don't know [what ].

↑  
What should I buy for her?

2. [What ] is more important than [what ].

↑  
What are you?

↑  
What do you have?

#### 4. おわりに

以上、語のコアから文法現象を捉えるレキシカルグラマーのアプローチを、いくつかの事例を通じてみてきた。レキシカルグラマーの最大の強みは、やはり、語のコアを土台とするネットワーキングの力である。つまり、一見したところ意味のつながりがないと思われる複数の用法(構文のみならず品詞が異なる場合も含めて)の間に、コアによる一貫した語の用法理解を打ち立てる点にある。この一貫した理詰めの説明は、学習者に「なるほど、そうか」という納得感を与える、「これなら使えるぞ」という自信を育むことによって、より積極的な表現活動をも促す可能性がある。その意味で、レキシカルグラマーは、従来の学校文法では果たし得なかった、コミュニケーションに資する文法指導を可能にする潜在性を秘めていると言えるのではないだろうか。

#### 参考文献

- 田中茂範・アレン玉井光江・根岸雅史・吉田研作(編著) 2005. 『幼児から成人まで一貫した英語教育のための枠組み—ECF』 リーベル出版.
- 田中茂範・佐藤芳明・阿部一 2006. 『英語感覚が身につく実践的指導:コアとチャンクの活用法』 大修館書店.
- 田中茂範・武田修一・川出才紀編 2003. 『E ゲイト英和辞典』 ベネッセコーポレーション.  
『PRO-VISION ENGLISH COURSE I』 桐原書店.